

キャンパスを  
食べる



第5回  
ニホンミツバチ  
(蜂蜜と幼虫)

蜂蜜は原始から人類が利用している甘味であり、薬用食品でもある。日本ではハチは「蜂」として認識されているが、欧米では蜂蜜を貯蔵する「bee」と肉食のスズメバチなどの「wasp」の2つに分けて認識されている。生田緑地内にはニホンミツバチが営巣している場所が何箇所かあるようだ。昨年の夏前までは大学構内の木造校舎の壁の中に巣を作っていた。作っていたというのは、昨年夏以降は構内で確認できていないからで、条件が合う場所さえ作ってあげれば戻ってくるであろう。蜂蜜採りの時期は、幼虫がいない12月、1月がベストである。写真は昨年取り壊された木造校舎の壁板を取り外して出てきたニホンミツバチの巣の一部である。ニホンミツバチは数十種の花の蜜が合わさった「百花蜜」であり、セイヨウのミツバチの「単花蜜」とは異なり、巣周辺の植生により大きく味が左右されるようであるが、大学構内の物は癖がなく美味しく頂けた。なお、木造校舎解体直前には巣に幼虫が入っている時期であったが、再度巣を採取した。幼虫が入っていない部分からは蜂蜜を採り、そして当然幼虫も食べてみた…。幼虫は小さく柔らかすぎることからそれなりに料理する量を集めるのに苦労を要したが、佃煮に料ってみた。その味はというと残念だが少しアミン系の匂いがしてあまり美味しいものではなかった。知人が「小便くさい」と言っていたことを思い出した。2度と食べまい。(農芸化学科 荒谷 博)

